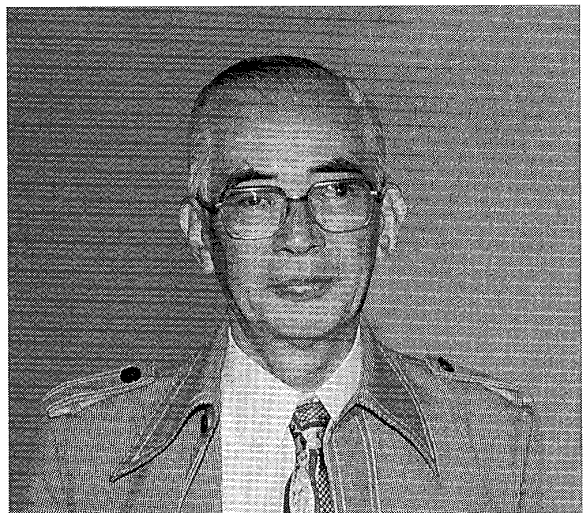


追悼

木村達明名誉会員を悼む

猪郷久義・大花民子



本会名誉会員・財団法人自然史科学研究所理事長・元東京学芸大学教授木村達明先生は、平成13年6月18日享年75歳不帰の客となった。葬儀は6月30日正午過ぎ文京区の名刹、護国寺でしめやかに執り行われた。ときあたかも年会・総会開催中とあって多くの学会関係者の弔問を頂いた。このたび平野弘道会長から兩名に対し紙碑執筆の機会を与えられたので、ここに改めて故人の遺徳を偲び、哀悼の意を表しつつ冥福を祈りたい。

木村先生は歳を経ても壮健であったが、一昨年あたりから歩行にやや難をきたして、5月30日自宅玄関前で転倒し頭部を強打した。ただちに救急入院し適切な治療を受けたが、脳挫傷による昏睡状態がつづき、6月18日正午過ぎ再び目覚めることなく、御家族に看取られながら安らかに旅立った。故人は大正14年11月27日東京で出生し昭和の激動期に成人した。昭和18年東京の昭和第一商業学校を卒業し、東京高等師範学校併設の臨時教員養成所に入学した。学半ばで応召したが、幸いにも終戦で大塚の学舎に復帰がなかった。昭和22年同所を卒業、旧制群馬県立沼田中学校に赴任したが、戦争で頓挫した向学の初志は捨てがたく、昭和24年再度上京し東京文理科大学理学部に入学、地質学鉱物学を専攻する。卒業研究は赤城火山の基盤の火成岩類であったが、片品川上

流の時代未詳古生界から、三畳紀後期—ジュラ紀初期の植物化石を発見、岩室層を提唱しその成果は大冊の卒業論文となった。昭和26年卒業とともに東京教育大学付属高等学校の教諭を拝命した。当時の俊才英才の生徒達はいまや各界で功なり名を遂げている者が多いが、悲報に接し護国寺に駆けつけ、旧誼をことのほか重んじた先生の霊前に焼香した。付属高等学校在勤は短く9年間であったが、夏季休暇には各地の中生代植物化石の本格的な採集をつづけ、常に学殖の蓄積を怠らなかった。昭和35年に学校法人目白学園に転じ、女子短期大学の創設に携わり、法人理事、学長事務取扱ならびに教授として教育と学校運営に手腕をふるった。昭和36年には東京文理科大学から理学博士の学位を授与された。短大の運営が軌道に乗るとともに、同学園女子高等学校・中学校校長に推され、女子中等教育ならびに私学振興に多大の貢献をした。このころ先生はまさに壮漢期であったとはいえ、心身の休まるときは皆無であったと推察する。しかし錯綜する校務を手際よくこなしながらも、学問研究に対する心組を常に昂揚させていた。古植物学の研究はもとより、地学教育・理科教育の現代化・近代化など当時社会的な要請でもあった教育改革への研究推進にも指導的な立場を担った。さらにこの時期には後年手取化石植物群の全体像を明らかにするのに役立った保存良好な大型標本を、現地の協力者とともに加賀白山の奥地から多数採集した。また夏季休暇中にはイギリスに赴き、古植物学の世界的な泰斗 Harris 博士を訪問し、その心眼に直接触れさまざまな教えを受けた。さらに海外の古植物学関係の膨大な文献を丹念に収集し「木村古植物学文庫」の礎を作った。このような先生の学問と教育に対する真摯な態度と貢献を、高等教育界は見逃さなかった。昭和49年には東京学芸大学から教官就任への強い要請があった。このとき先生は48歳、すでに半生を越え目白学園女子短期大学では理事会・教授会の重責を担い、女子高等学校・中学校の名校

長として、教職員・学生・生徒の敬愛と崇敬を一身に集めていた。しかも国立大学の人事の弊害とはいえ、用意されたポストは助教授でいわゆる降格人事であった。先生はこの就任要請に当初大いに戸惑ったが、あえて大幅な減知に甘んじ、与えられた学問研鑽と高等教育貢献への道程を選択した。東京学芸大学に就任した先生は、ただちに持ち前の活力と明晰な知慮才能を遺憾なく発揮し闊達な人柄と相俟って、教育と研究はもとより教室や附属中学校の運営、関連する学会活動に邁進する。昭和51年には教授に昇任し、先生の学殖に魅了された多くの学生が盤踞して机を並べる「木村研」が誕生した。この研究室には海外の著名な研究者も訪問滞在し、留学生も机を並べた。先生が昭和63年定年退職するまでの15年間、木村研はまさに「木村古植物学研究センター」の感があった。ちなみにこの学窓を巣立ち他大学の大学院から学位を授与された者はすでに10指を数える。先生自身もこの間は知力・活力が充実し全開始動、本邦はもとより東南アジアや韓国などの中生代植物化石の研究に没頭し、多くの記載論文をはじめ、進化や古環境などに言及した論文を続々と公表した。とくに東アジア全域の中生代古植物地理区の設定は、自身の研究はもとより、旧ソ連や中国などの膨大な数の論文を読破し、分類群を精緻に検討して作成された。この一連の論文は現在でも海外の研究者によってもしばしば引用されている。さらに先生はかねがね化石植物の組織学的研究の必要性を説いていたが、一般には本邦の標本ではほとんど不可能とみられていた。しかし、白亜系の葉や繁殖器官化石などでその端緒を開き、協力者と共に画期的な論文を発表し、先生が崇敬したHarris博士の薫陶に報いた。東京学芸大学は初等中等教育界に優秀な人材を送り出すことが重要な使命の一つである。先生はこの要請に対し教師の理想像を教室や実験室、さらにフィールドで率先垂範した。授業中先生は常に威儀を正し、やや高めの声音は教室の隅々にまで凛として響きわたり、皆その巧みな話術に引き込まれ傾聴した。また板書の文字や図はときに芸術的でさえあった。先生の薫陶を受けて巣立った当時の学生は現在教育現場や、指導主事などとして教育界で活躍して

いるものが多い。

先生は昭和63年3月定年を迎え、かねてから準備を整えていた自然史科学研究所を設立し、財団法人としての認可も受けて古生物学研究とその普及を計る第二の人生のスタートを順調にきった。ここでも研究や学会活動を軌道に乗せ、海外の研究者との共同研究なども推進した。先生は総数200編にも達する多数の学術論文を公表したが、それ以外に早くから該博な知識を活かして高等学校地学の教科書、指導書、参考書、さらに普及書などにも健筆をふるった。また関連学会の各種委員としても極めて活動的であった。なかでも東京地学協会では理事として同協会の財政面の安定化に尽力し、日本古生物学会では昭和53年から評議員、昭和62・63年には会長を勤めた。評議員会では創立50周年記念行事委員長を手始めに、長く会計担当常務委員として経理通の才覚を遺憾なく発揮した。

先生はこよなく日本酒を好み百斗の豪酒であったが、庶民的なコップ酒をもっぱら傾け銘柄品に手を伸ばすことはまずなかった。酔の兆しは隠し芸の御披露で、動物の行動の真迫な物真似であった。目白学園時代には宴席でしばしば美声を披露したが、十八番はラノビアであった。先生はまた大変な愛煙家で頑固なまでに両切りのピースに執着した。一方では進取の気性に満ち、昭和30年代にはすでに車の運転を始め、通勤はもとより野外調査の遠出も厭わなかった。壮年時代から先生の服装は極めて高尚なお洒落で、仕立てのよいダブルの背広に渋いネクタイが定番であった。常に背筋を伸ばし、古きよき時代の青年将校を見るような気品をただよわせ、きびきびと歩行し礼節と規律をことのほか重んじた。

先生が設立した財団法人自然史科学研究所は、数年前から市井の経済状態の暗雲で、その運営に大きな支障が生じ始めた。先生はこの困難を研究の質や「化石友の会」のサービスの低下には結びつけないとの信条を貫き通したが、非力の私共兩名にその業を無言で残したまま急ぎ旅立ってしまった。私共その遺志を継承するにあたり、僭越ながら故人になり代わり、会員諸氏の更なる御指導御鞭撻を胸中よりお願いして擱筆する。